図書館だより

２０２０冬
No. 257
調布市立図書館

水木しげる氏

表紙絵

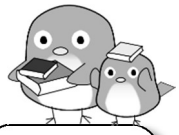
＝急げ！逃がすな終電＝

表紙絵：水木しげる

・ 特集：私のすすめるこの一冊 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～6
・ 絵本の読み聞かせ講座 ・・・ 7
・ 郷土の歴史と伝承 ・・ 8

※音声版をご希望の方は図書館へご連絡ください。

私のすすめる この一冊



毎年恒例の皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です
今年はどんな本と出会えるでしょうか

『リンドグレーンと少女サラ－秘密の往復書簡－』

アストリッド・リンドグレーン著　サラ・シュワルト著　石井 登志子訳　岩波書店

推薦者：原田 純子

女優を夢見ているサラ１２歳は，「長くつ下のピッピ」の作者リンドグレーンの作品の映画化にときめき，作者に直接手紙を書きます。それが当時６４歳の作家とサラの３１年間の文通の始まりです。サラはあとで恥ずかしくて訂正の手紙を出すほど赤裸々な日常を書きます。家出，万引き，ずる休みの事。男の子に煙草を勧められ，粋がって煙を深く吸い込んでみせ男の子に「尊敬」された事まで。その話にリンドグレーンは驚きの提案をします。「サラが２０歳まで喫煙者でなかったら千クローナ贈ります」と。サラは感激しますが，今後煙草は吸わないと断ります。しかしこの提案は後にサラの窮地を救うことになります。

青少年精神クリニックに入れられたサラにリンドグレーンは「サラは正常でリンゴのように新鮮だ」「なりたいものは何かを考えてくれるとうれしい」と励まします。サラが，文通を通して書く事は自分を生かす事と気付いてゆくプロセスはリンゴのように新鮮です。

『かくされてきた戦争孤児』

金田 茉莉著　講談社

推薦者：長尾 敏博

「子供は国の宝」という言葉がある。だが敗戦後の日本では真逆のことが行われていた。学童疎開中に空襲で両親を失った子供はどうなったのだろう。親戚や施設に預けられて苦労して何とか戦後を生き抜いた。この程度が私の認識だった。しかしその実態が明らかになった。たとえば親戚に預けられた子は，一割程度しか愛情をもって育ててもらえなかったという。実子と差別され，労働力として奴隷同然にこき使われたり，逃げ出した子は浮浪児になった。社会の厄介者として捕らえられ，強制的に施設に収容されたり，山奥に捨てられた子もいたという。餓死したり，精神を病んだり，自殺した子もいた。また疎開児で現地に残された子には人身売買も行われたという。こんなことが本当にあっていいものか。国から何の援助もなく，児童福祉法の網にも掛からなかった子供達。戦後この国は一番大切なものを，見捨て隠蔽し発展を遂げた。この事実を知って欲しい。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー
－The Real British Secondary School Days－』

ブレイディ みかこ著　新潮社

推薦者：銅谷 孝子

英国では国が認めない理由で子どもが学校を休むと両親それぞれに罰金が掛かり，払わないと２５００ポンドにもなり，また３ケ月の禁固刑もあると，この本に書かれてあり驚きました。

著者は九州出身で１９９６年から在英し，アイルランド人で大型ダンプの運転手の夫と息子の３人で暮らしていて，ずっと保育士をしています。ホワイト・トラッシュ（白い屑）と表現され白人労働者階級の子が通う地元の中学校は「もと底辺中学」といわれていましたが，息子の希望で入学し，それからの１年半の学校生活を母が記録したものがこのすばらしい本です。

文中カタカナ単語が山積し難解ながら何とか読み終え，読み甲斐のあった深い内容には心打たれるものがありました。

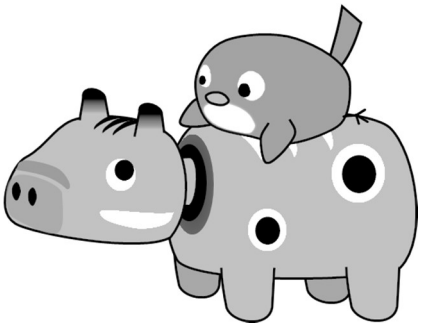
国籍・人種・宗教・貧富・教育差等々あらゆるものに格差があり，人生や生活は差別によって動かされています。日本在住で無い著者の作品はこれからの発刊本も待ちつつ楽しみに期待しています。

『調布市史　－民俗編－』

調布市市史編集委員会編集　調布市

推薦者：香月 尚子

先頃調布市民になった。サイクリングロード・遊歩道を有した野川ではカエルの卵・水澄まし・エビ・大鯉・鵜・鷺・鴨・カワセミを見た。人は其等の傍らを走り散歩する。上手く人間と共存し，お互いが憩いの場となっている。その川に点在する干支刻石碑を見た。大方が橋の袂にあるので資料はないかと図書館に行くと疑問は直ぐに解けた。転入者なので市史を薦められた。昭和６３年作成民俗編だ。明治・大正・昭和の激動時代を生き抜かれた大勢の古老方々からの聞き取りで生活様式や風俗習慣等が詳細に記載されていて，実に興味深い。調布市は高い台地の武蔵野の面から三段の高さの地形を持つそうだ。その地形から生み出される営み事が風情を醸し出し文豪達のいう実（じつ）ある地域となっていることを知る。国木田独歩の武蔵野を再読したくなった。市史を知り読むのと知らぬとでは大違いであった。日常にふと思う説話の彼此は，日々に趣き深い喜びを得るものである。



『三体』

劉 慈欣著　大森 望訳・光吉 さくら訳・ワンチャイ訳　早川書房

推薦者：中澤 正美

本の中の世界に吸い込まれる。その世界から戻りたくなくなる一冊。

舞台は中国，科学者達がなぞの死をとげていく中，ある日主人公の身にも異変が起きる。突如，視界に映し出されたタイムリミット,『三体』というゲームの出現との関係，そして導き出されていく地球と異星人との現状。

外国人の書いた外国が舞台の話，それだけでは決して終わらない。これからの未来にこういった事が起こりえないとは言い切れない，そんな物語である。

頭の中の想像という力を総動員し，色，形，匂い，手触り，音，全てを想像せよ。この本にはそれができる。

『三体』世界へ，ようこそ。

『生協の白石さん』

白石 昌則著　東京農工大学の学生の皆さん著　講談社

推薦者：岡本 弘江

この本ほどユーモアは知的！！ということを感じさせたものはない。大学の生協に勤める白石さん。学生からの様々な品物や書物などの注文に対する答え方が素敵です。ただ入荷日を書くだけではなく，それに関するチョットした話を加える…。それを読んでニコッと笑える。意味がわからないと笑えない。たとえ浅くても幅広い知識や情報を持ってなくては瞬時に理解できないユーモアあふれる回答。ユーモアをわかる，または言えるというのはかなり高いレベルのセンスを持ち合わせていないと不可能なこと。だからこの本の中のやり取りを読んで笑える自分に満足したり…。知的でなければユーモアはわからない！と勝手に本のおもしろさと共にちょっぴり自己満足にも浸れる一冊です。

『天、共に在り　ーアフガニスタン三十年の闘いー』

中村 哲著　NHK出版

推薦者：北郷 淳一

昨年１２月に，アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲さんの著作。

医学部に進むことになったきっかけや，アフガニスタンにおいて医療，さらには灌漑事業に取り組むことになった経緯が淡々と，力強く語られます。

しかし，多くが述べられるわけではありません。理屈などはなく，そこに病気で困っている人々がいたから，田畑が砂漠になってしまい生活できなくなってしまった人々がいたから，それだけなのだと思います。爆撃を受け続ける中でも退去せず，現地の人々と共に事業を続け，砂漠を緑に変えていった日本人がいたことを，私たちは決して忘れてはいけません。氾濫する情報に惑い，本当に大切なことを見失いがちないま，改めて広く読まれるべき一冊だと思います。

『デューク』（『つめたいよるに』より）

江國 香織著　新潮社

推薦者：上江 結弥

この本の中で一番印象的だったお話は，最初の短編『デューク』です。

この物語は，愛犬であるデュークを失くした主人公の女性が，ある少年との出会いを通して心情を変化させていくお話です。このお話の素晴らしいところは，愛犬を失った「私」の感情を細かに描写している点や，少年とデュークとが巧みに重ね合わせられている点です。主人公が愛犬を失くしたことに対する悲しみを受け止める姿や，少年との出会い，少年と別れた後の余韻には誰しも必ず共感するところがあると思うので，読んでみてください。

『怪人二十面相　―少年探偵―』

江戸川 乱歩著　ポプラ社

推薦者：佐々木 功

本書は過去にポプラ社から刊行された作品が文庫本になった本です。十年余不明だった羽柴家の長男，壮一君が突然帰郷して喜ぶ家に東京中で噂の盗賊「怪人二十面相」からロマノフ王家に伝わる大ダイヤモンドを近日中に狙うとの予告状が届いていました。

変幻自在の賊はどのように家宝を盗みに来るのでしょうか。名探偵明智小五郎との初対決の幕が開きます。日本探偵小説の要に位置づけられる江戸川乱歩自身少年平井太郎時代に探偵ものの小説に出会って作家人生を定めたとも。孫の平井憲太郎氏は祖父の姿は最初の孫に対して「優しいおじいちゃん」であり，祖父の部屋には全国の読者からの投書や年賀状がたくさんあった，自分の作品がそれだけ多くの子どもたちを喜ばせている，それが一番の楽しみだったのかもしれない，と述べています。本文を紹介すると興味が移るので別のお話を書きました。どうぞ全二十六巻をぞくぞくしながらお楽しみください。おお怖い。

『ふしぎ駄菓子屋銭天堂』

廣嶋 玲子著　偕成社

推薦者：上江 明穂

本当にはありえないおかしがいっぱいでてきます。うすぐらいろじを見つけた人はついはいってしまう。ろじをとおりぬけると駄菓子屋「銭天堂」という駄菓子屋につくお話です。いろんなおかしでいっぱい！！たとえばアイディアあんこ・チャーミングミなどなどいろいろなおかしやおもちゃがいっぱいのふしぎな駄菓子屋さんです。ぜひ図書かんで見つけたらかりてみてください。わたしがしっている銭天堂のお話は，１４かんまでです。よどみさんというあくをさがすこわぁい人も出てきます。

『シェパートン大佐の時計』

フィリップ・ターナー著　岩波書店

推薦者：井上 暁子

建具職人の息子デイビドは少し足が悪く，そのことをちょっと気に病んでいるが，空想力がたくましくいつも物語を考えている。彼の家には祖父の代に修理を請け負ったまま放置されている不思議な大時計がある。農家の息子アーサーは，デイビドにとって特別な友人であり，英雄でもある存在だ。牧師の息子ピーターは馬車小屋を「魔術師の巣」と称してそこで実験に明け暮れている。この好奇心旺盛仲良し３人組の少年たちがちょっとした冒険をしたり，大時計の謎を推理したりしながら物語は進んでいく。少年たちは周りのおとなたちから，時にはいたずらが過ぎて大目玉をくらうこともあるが，いつもあたたかい思いやりに満ちた対応を受けている。何より欠かせないのが独特の話し方をするチャーリーじいさんの存在だ。じいさんの少年たちに対する理解の深さと包容力がとても心地よい。ミステリーの要素もあり，ぐいぐい引き込まれていく作品である。

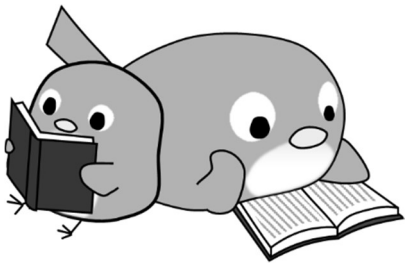
『名探偵ポアロ　オリエント急行の殺人』

アガサ・クリスティー著　山本 やよい訳　早川書房

推薦者：上江 智希

あなたの名探偵はだれでしょう。世界でシャーロックホームズとともに名を挙げられる名探偵，その名はエルキュール･ポアロ。今回舞台となるのは豪華寝台列車，オリエント急行。そこである男が殺されてしまう。車内には階級，国籍どれも様々な人々が乗り合わせていた。更に部屋は密室，おまけに乗客全員には完璧なアリバイがあった。この複雑かつ怪奇な事件にポアロが立ち向かう。捜査を進めて見えてきたのは，おどろくべき事実の数々。そして最後にポアロがたどりついたのは，誰もが予想し得なかったしょうげきの答えだった。「ミステリーの女王」アガサ・クリスティーがおくる，世界で２０億部読まれ，今もなお愛され続けている永遠の名作オリエント急行殺人事件。あなたも一度手にとって，ページをめくってみてはいかがでしょうか。きっとあなたをすばらしいミステリーの世界へ，いざなってくれることでしょう。

たくさんのご応募ありがとうございました。
お寄せいただいた原稿は，掲載の都合により一部編集させていただきました。
掲載は順不同になっております。ご了承ください。



令和2年度

絵本の読み聞かせ講座　を行いました

調布市立図書館では，年に１回，子どもへの読み聞かせに関心のある方を対象に連続講座を開催しています。令和２年度は，１０月１・８日（木）に行いました。

学校やご家庭で読み聞かせを経験されている方も，読み聞かせは初めてという方も，熱心に受講されていました。

１日目は，「なぜ読み聞かせが大事なのか」といった講義や，絵本の持ち方やページのめくり方の実践などを行いました。２日目は，どんな絵本が読み聞かせにおすすめなのか，実演を交えながらたくさんの絵本をご紹介しました。

▲講義の様子

絵本の紹介を交えながら，読み聞かせのコツをお話ししました。

▲絵本の持ち方

講師の見本に合わせて，絵本の持ち方，ページのめくり方を実践しました。

●図書館に寄せられる，よくある質問

どんな絵本を選んだらいいか分かりません。

図書館で発行しているリストをご活用ください。おすすめのポイントや，対象年齢が書かれています。

声色は使ったほうがいいのでしょうか。

自然に使える人は使ってもいいですが，無理に使う必要はありません。おおげさな声色や身振りを使うと，聞き手はそちらに気を取られてしまいます。あくまで本が主役です。

▲『今日のおはなしなーに？』

絵本の持ち方のポイントや，読み聞かせの留意点などが載っています。市内各図書館で配布しています。

来年度も開催予定です。読み聞かせや絵本に興味のある方はぜひご参加ください！

郷土の歴史と伝承

調布の副業と都会のくらし

関　口　宣　明

１．現金収入が必要になった農家のくらし

農村では長い間，暮らしに必要な物資は自分のところの生産品でまかなってきたので，現金収入を他から得る必要はほとんどありませんでした。しかし，江戸時代の後半になると，物資の流通が広まり，生活に便利な品物や肥料などを買うために，現金をさまざまな副業で得るようになってきました。それでは調布の農村で行なわれた副業にはどのようなものがあったのでしょうか。

２．洋食の始まりに応じた鶏卵販売

明治時代に入ると，旧東京市内にも牛鍋（すき焼き）屋ができるなど，肉料理が外食として広まり始めます。また明治 42 年（1909）の記録によれば，廃兵院（軍の病院）や女子大学寮の食事には，カツレツとともにオムレツがたびたび出されていました。（『明治文化史』）このような都会での鶏卵の需要の高まりに応じて，調布市域では，すでに明治 10 年（1877）から，上飛田給村で年間 2,000 個の鶏卵が採られ，東京へ売りに出していました。

当時調布で飼われていた鶏は「地鶏」といって，黒と赤のまじった色の在来種です。鶏を飼うことは，昔から目覚まし時計のかわりとなるなど，農村のくらしと結びついたものでした。また，脱穀のときにこぼれ落ちた穀物が餌となるため，放し飼いができて元手がかからず，しかも東京との距離が近いので，新鮮な卵を提供できる利点もありました。ちなみに明治中期の卵の値段は１個３銭ぐらい（今の 1,000 円前後）で，今日からみるととても高価なものでしたので，一般家庭ではほとんど口にすることがありませんでした。（『調布こぼれ話』）

鶏の水飲み

３．都会の年中行事に向けた副業

江戸時代から人口増加により開け，周りに草木が少なくなっていた明治期の東京でも，「月見」の行事は根強く続けられていました。そこで，調布でもさかんに栽培された禅師丸の甘柿は供え物として欠かせないものでしたので，この時季にあわせて神田青物市場へ出荷されました。

また明治時代から上石原地区で行われてきた「虫売り」もユニークな副業としてあげられます。これは毎年，鳴く虫の宝庫だった多摩川の川原などから，鳴き方に特徴のあるカワラエンマコオロギをはじめ，カンタン，松虫，クツワムシ，スイッチョ（馬追虫）などを採って虫かごに入れ，天秤棒でかついで四ツ谷，飯田橋付近，御徒町，浅草方面に出かけた行商です。秋の涼感を伝える虫の声は，自然を求める都会の人々に喜ばれました。そして，明治終わりごろから，8 月に向島百花園（墨田区）で催された「虫放ち会」でも人々の耳を楽しませ，調布の虫は千葉の虫より音色がよいと評判だったそうです。得意先だった向島の料亭などでは，牛車で野菜を売るよりも良い値で引き取ってくれたといいます。この行商は昭和 12，3 年ごろまで続けられました。これらの副業をみると，村の外に出かけることで都会の需要を見出し，有利に換金できる商品を考え出しながら，暮らしを豊かにしようとした先人の努力がうかがえます。

参考文献：『近世調布の村むら』『府中の風土誌』

刊行物番号
２０２０－１３７

図書館だより　第２５７号

令和２年１２月２５日発行　［庁内印刷］
発行　調布市立図書館
〒182-0026　東京都調布市小島町2-33-1
℡　042-441-6181
http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/